

第5回

音声学研究

音声教育の関連分野を中心に

大阪大学文学部 土岐 哲

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究についての情報をおとどけしています。今回のテーマは音声です。

1. はじめに

音声学が発展してきた過程を考えると、音声教育が大きく貢献していることが分かります。ある言語音の特色は、その言語を母語とはしない人々によって、まずは客観的に意識されやすいからです。一方、その言語を母語とする者にとっても、学習者による、その言語音本来の姿とは異なる現象に直面して初めて本来の姿を意識するということが多いものです。音声の教育にかかわる研究は、大変幅が広いと言えます。教育という以上、学習者だけではなく教師側のことも考えなければならないからです。また、教育の相手が(1)外国語話者、(2)日本各地の方言話者、(3)言語の運用や音声器官に何らかの障害のある人、などによっても研究方法が違います。ここでは、外国語話者に対する日本語音声教育の研究を中心に述べます。

2. 音声教育史・音声教育論

この種の研究は、近代以降のものが中心となります。それも、当時の教師達が影響を受けた可能性のある書物や教師自身の考えで作られた音声教材等が検討資料の中心になります。もともと、教育場面の一瞬一瞬は消えて行くもので、学習者も教師も、自分がどのように意識して学んだかとか、どんなつもりで教えたかについて客観的に記述するのは難しいからです。しかし、日本語教科書などを見ると、日本語を客観的に考えようとした人々

の積極的な姿勢が見られるなど、当時の音声教育についていろいろ考えさせられます。

音声教育論は、学習者に対して目標言語の音声をなぜ、どの程度教えるべきか等について考えるものですが、大きく分けて(1)学習者に生じる問題を構造的に解説しながら、問題解決のための方法を中心に言及しているもの、(2)方法論というよりは、学習者の置かれた立場、学習後の問題等について考えるもの、などがあります。

3. 音声教材分析

音声教材は、作者やその教材を選択した教師達がどんなシラバスに従って日本語音声教育を実施しようとしたかを探る手立てとなるものです。作者の意図とそれを使って指導する教師の扱い方が全く一致するとは限らないにしても、音声教育の内容を知る上で、ひとつのパラメータとして考えることはできるでしょう。また、日本語音声の説明をする場合に、どのような言葉を用いているかを見ると、作者が日本語音声をどのように見ているかを知ることできます。(例：母音の無声化「unvoicing-, devoiced-, voiceless vowels, whispered syllable など」)

4. 対照音声研究

言語の対照研究のはじまりは音声面からであったといわれます。この種の研究がされるようになった背景などを考えると、世の中の動きと無縁ではないことが伺われます。戦後、アメリカとの関係が緊密化され、アメリカ



人学習者の増えたことなどが英語との対照研究を生み、英語で説明する日本語の教科書が増えました。戦後間もなく、東南アジア諸国から賠償留学生を受け入れた頃には、その留学生たちの母語との比較対照をきっかけとして生じた資料も見受けられます。ただ、題材の殆どが単音レベルか音節レベル、語アクセント・レベルであって、イントネーションまでは扱っていません。それは、一つには、対照する他方の言語でもイントネーション研究はまだ十分に進んでおらず、資料がなかなか得られなかったからでしょう。

5 . 中間言語研究

1970年代に入ると、言語教育研究も大きく変化します。それまでの対照研究、誤用研究では、学習者がどんな問題を起こし、どの程度に不完全さを引き起こすかが話題の中心でした。学習者は絶えず何かの問題を抱えていて、進歩発展の途中にあるものとして扱われましたが、中間言語研究の考えでは、学習者（A語話者）の話す目標言語（B）は、A Bのいずれでもなく、中間言語という、一種の独立した人格を認めようという考えが基本です。しかし、いくらA Bどちらでもないといっても、学習者の音声を聞けば、その人の母語が分かる部分も多いということ。もう一つは、A B双方の特徴を微妙に保持している音声を観察するには、その違いを厳密に聞き分けられる能力が必要なため、その研究に取り組む人の数には限りがあるということです。また、日本で中間言語研究が一般に浸透した時期、音声研究の流れが単音や音節のレベルから韻律研究に変わり、中間言語研究の殆どはアクセントやイントネーションをテーマとしたものです。なお、この時期には、音声分析機器が急速に発達し普及しました。

6 . 実践報告等

この種の研究には、従来の理論を音響分析機器の機能を使って応用したものと、従来あまり行われてこなかった分野の理論を再編成して実践に結び付けたものなどがあります。いずれの場合もデータの取り方や書き方は簡単ではありません。一口に実践報告とは言っても、どんな人が、どんな人に対して、どのように実施した結果なのかによって成果も微妙に変わってくる可能性が残されるからです。

7 . 母語話者や学習者による音声の認識や評価についての研究

聴覚音声学に関わる問題です。これまでの音声教育では、図解説明などで解説を付け加えたとしても、やはり最後は教師の言う通りに繰り返させてきました。しかし、その繰り返しを学習者が果たして教師の思ったとおりに受け止めているのかどうかはよく分かりません。その時の反応がうまく行かなかった場合、その原因が単に発音の仕方にあるのか、それとも発音以前に、モデルの音声を認識する段階で問題があったのかなどについては、十分に検証されていないようです。わずかに認知心理学の研究者によって非常に限られた範囲での実験報告などが知られているだけでしたが、最近は、音声学や音声教育の分野からもこの音声認識に関する研究が見られるようになってきました。

8 . むすび

日本語音声教育についての資料が豊富にあるとは、まだ言えません。ただ、まだ刊行されていないものの、各大学院等に提出された修士論文などを見ると、大きな可能性を秘めた基礎研究的論考も見られますから、今後期待できます。なお、上記の他に、「教師のスピーチ・スタイルについての研究」なども考えられます。

どんな研究でも、基礎研究と応用研究があります。日本語教育などを考えた場合、ともすると、どうすればすぐ上手に教えられるか、などと応用的手段を考えたいものですが、きちんとした基礎研究の知識がなければ、当然よい応用には結び付きません。

参考文献

- 杉藤美代子（編）（1989・90）『講座日本語と日本語教育 2・3 日本語の音声と音韻（上・下）』東京、明治書院
 『音声学会会報 日本音声学会70周年記念号特集「音声研究の展望」』（1996）東京、日本音声学会
 服部四郎（1984）『音声学』東京、岩波書店
 天沼寧他（1978）『日本語音声学』東京、くろしお出版